

令和5年度 学校評価 最終報告

教育活動

石川県立医王特別支援学校

重点目標	具体的取組	主担当	実現状況の達成度判断基準	結果		判定基準	分析（結果と課題及び改善策等）
(1) 授業実践力の向上	教科の見方・考え方の視点を意識した授業に取り組む。	教務課	各教科等を合わせた指導において、教科的な見方・考え方で授業の内容を話し合い、教科の視点で児童生徒の変容を捉え、評価することができるようになってきたと考える教員の割合が A：80%以上 B：70%以上 C：60%以上 D：60%未満	A	○	C、Dの場合は工夫改善を図る。	結果：教職員アンケートでは各教科等をあわせた指導において目標設定や評価ができた（30%）、ややできた（70%）で合計100%であった。 成果：全員が教科の視点を意識した授業を行うことができ、校内研究会や教科指導等研究会を通して国語の授業に対して共通理解が深まった。 課題：教科の視点を意識した目標を設定し授業を行ったが、ややできたと回答した割合が多く、今後も教科の見方・考え方を意識したり、教科の評価については話し合ったりする必要がある。 改善策：来年度の校内研究会では、さらに授業研究を通じて教科の見方・考え方について共通理解を図っていきたい。また、児童生徒の変容を捉え、評価することに関しても話し合いを行っていく。
				B			
				C			
				D			
(2) 安心安全な学校づくり	コロナ対応を含めた学校行事の柔軟な企画・運営	病棟訪問教育	コロナ禍等を含めたこれまでの経過を踏まえ、学校行事や学部行事について、病院と連携し、方法・内容について検討・企画し、安心安全に配慮して実施できたと感じた教員の割合が A：80%以上 B：70%以上 C：60%以上 D：60%未満	A	○	C、Dの場合は工夫改善を図る。	結果：教職員アンケートでは、実施できた（75%）、ややできた（25%）で、合計100%であった。 成果：行事運営に関しては、教員全員が携わりコロナ前の実施方法・内容の確認も行いながら、状況に合わせた対応を検討することができた。病院との連携については確認すべき内容を再認識する機会となった。 課題：病棟内で行う行事と個別に参加する病棟外での行事では、安心安全に関する配慮事項が異なるため、病院とより連携・確認を密にし、丁寧に進める必要がある。 改善策：日時、方法、参加者等を含めた計画を時間的な余裕を持って検討、企画する。その際も病院との確認を重ねていく。
				B			
				C			
				D			
安全防災対策の充実	安全防災対策の充実	指導課	学校の安全防災対策等の課題や課題解決に向けた実践を知ることのできたと感じる保護者・児童生徒の割合が A：80%以上 B：70%以上 C：60%以上 D：60%未満	A	○	C、Dの場合は工夫改善を図る。	結果：保護者アンケートでは、よくあてはまる（91.7%）、ややあてはまる（8.3%）で、合計100%であった。 成果：学校の安全防災対策については、避難訓練、不審者対応等を行いながら、未然防止策も検討してきた。実施したことを周知することで保護者からは概ね満足との結果が得られた。 課題：休業中に起きた能登半島地震については、被害確認、保護者連絡等に関してやや課題があり、課題解決に向けた取り組みが必要である。 改善策：危機管理マニュアルの見直しを行い、有事に対応できる体制づくりをしていく。保護者の意見を聞き取りながら、病院と対応できることを検討しながら実践していく。
				B			
				C			
				D			
(3) 専門性の向上とセンター的機能の充実	病種理解のための研鑽	教務課	病種理解の研修会や事例検討会、自主的な研修会等への参加を通して、自らの専門性が向上したと感じた教職員の割合が A：90%以上 B：80%以上 C：70%以上 D：70%未満	A	○	C、Dの場合は工夫改善を図る。	結果：教職員アンケートでは、向上できた（25%）、やや向上できた（75%）で、合計100%であった。 成果：前期には福井大学の笹原先生による重度重複障害の研修会、後期には医王病院の心理士による心のケア研修会を行った。また、すべての児童生徒に対して事例検討会を行った。アンケートでは、すべての教職員が概ね専門性が向上できたと回答した。 課題：病棟訪問教育、小中高に在籍する児童生徒の病種理解をさらに深めていく必要がある。 改善策：来年度前期の研修会では、ビデオ検証の仕方を教えて頂き、授業研究につなげていきたい。また、後期の研修会では、教職員に知りたい内容について聞き、研修内容を考え行っていきたい。
				B			
				C			
				D			
教育機関・他機関との連携	教育機関・他機関との連携	コーディネーター、専門相談員	年2回の情報交換会や継続的な相談を実施する中で、児童生徒への対応や指導に活かすことができた特別支援学級等の担当者の割合が A：80%以上 B：70%以上 C：60%以上 D：60%未満	A		C、Dの場合は工夫改善を図る。	結果：担当者アンケートの1回目の結果では、活かすことができた（72%）であった。 成果：県内の病弱特別支援学級及び通常の学級に在籍する病気の児童生徒の担当者に必要に応じた相談を行った。継続した相談を実施している学校もあり、支援や指導に活かすことができていると考えられる。1月の能登半島地震のため、2回目の情報交換会は参加が難しいと回答する学校、回答がない学校が多く、実施を見送り、個別対応とした。 課題：病弱特別支援学級担当者の情報交換会については一定のニーズはあり継続して行っていく必要がある。 改善策：オンラインだけではなく参集型を希望する担当者もおり、今後より良い方法を検討していく。引き続き、相談しやすい体制づくりを行っていく。
				B	○		
				C			
				D			
(4) 業務の効率化	効率的校務処理の推進	教頭	業務内容の共通理解やICT機器を活用しながら業務内容や手順等の見直しを図り、効率的に校務処理を行うことができたとする教員の割合が A：80%以上 B：70%以上 C：60%以上 D：60%未満	A	○	C、Dの場合は工夫改善を図る。	結果：教職員アンケートでは、ややできた（83.3%）であった。 成果：今年度は、教職員の業務や校務処理に必要なアプリの活用や教材の共有等を身につけることを目標に、毎月職員会議後にミニ研修会等を行った。全教員のICT機器等の実態把握をもとに研修内容を計画して効果があった。課会では今年度の異動者の意見を取り入れ手順等の見直しも進んでいる。 課題：異動者の割合が多く、引き継ぎの課題や一部の教員に負担が多い部分がありその都度業務の平準化にむけた調整が必要だった。また、校務処理のデータの保存方法について把握しにくい等の課題があった。 改善策：今後、業務の引き継ぎを行っていくためにも、複数で業務内容を確認することが必要である。また、校務処理に必要なデータ保存について効率的に行う方法を検討することが必要である。
				B			
				C			
				D			